東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

はじめに

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 東京学芸大学附属国際中等教育学校 公開日: 2024-04-25 キーワード (Ja): STYP: 中等教育学校 キーワード (En): 作成者: 荻野, 勉 メールアドレス: 所属: 東京学芸大学附属中等教育学校
URL	http://hdl.handle.net/2309/0002000372

はじめに

校長　荻野　　勉

経済協力開発機構（OECD）は2023年12月、世界81カ国・地域の生徒を対象に2022年に実施した学習到達度調査（PISA）の結果を公表した。日本は読解力で3位となり、過去最低の15位だった前回18年調査から回復した。言語能力を学習の基盤と位置づけた学習指導要領を踏まえた授業改善が進んだことも背景にあると文科省はしている。一方で、日本の生徒は自律学習に対する自信の指標がOECD加盟国中、最下位だったことも判明した。「VUCA」の時代と言われるように変化の激しい社会を生き抜けるよう、子どもたちが普段から自律的に学び、目標を達成するような指導が学校現場に求められると言えよう。

さて、今年度末で2期指定満了を迎える本校のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の取り組みであるが、目下、引き続き次の5年間もSSH指定が得られるように第3期目の申請をしている。本紀要が発刊される頃にはうれしい知らせが文科省から届いていることを期待しているが、来期3期目SSHの本校のテーマは「IBの教育原理を活かした文理融合教育による、科学的コンピテンシーを備えた“Agents of Change”の育成」。今期から新設された文理融合基礎枠での応募となる。“Agents of Change”とは、“変化を起こすために自分で目標を設定し、振り返り、責任を持って行動する能力を備えた人”のことだ。そのような力を培い、社会課題を自分たちの力で解決していく人を育てる。本校が教育課程を実施する中で求めてきた「自律的な学びの姿」である。

本研究紀要は、そのような人づくりを目指す本校にあって、授業研究会をはじめ、各学年、各教科、グローバル・サイエンス・国際教養などの各委員会、および教員個人などが1年間の教育実践や教育研究の成果をまとめたものである。教育課程に、絶えず検証と改善が加えられているか、それが機能し時代の変化と要請に応える教育を作り出しているかを確認することは重要なことであり、日々授業実践する教員たちが、自らがかかわる教育活動について、論文にまとめ、その実践・研究を客観的な目で顧みることは、教育活動の自律的な改善へとつながる。地球規模の課題が出現し続ける現代社会にあっては、そのような不断の努力なくしては、社会の負託に応えられる教育活動は提供できない。本研究紀要で示した本校の取組みに対して、皆さまから忌憚のないご意見・ご感想をいただけましたならば幸甚です。

結びに、本研究紀要の企画・立案・編纂・刊行に携わっていただいたすべての方々のご尽力に深く感謝し、あいさつといたします。